

『神奈川県植物誌2018』～40年間の植物誌調査の成果～

たなか のりひさ
田中 徳久(学芸員)

これまでもあちこちで宣伝していますが、神奈川県はその植物相（ある地域に生えている植物の一覧）がよく把握されている都道府県の1つです。1933年に刊行された『神奈川県植物目録』（以下、『神植目33』と略記）、1958年に刊行された『神奈川県植物誌』（以下、『神植誌58』と略記）、1988年刊行の『神奈川県植物誌1988』（以下、『神植誌88』と略記）、2001年刊行の『神奈川県植物誌2001』（以下、『神植誌01』と略記）など、5冊の県単位の地域植物誌・植物目録が刊行されています。そして現在、6冊目となる『神奈川県植物誌2018』（以下、『神植誌18』と略記）が刊行準備中です（本誌が皆さんのお手元に届くころには、PDFが公開され、冊子体も印刷に入っていると良いのですが…）。ここでは『神植誌18』のための調査で得られた成果について、“仮”の紹介にはなりますが、『神植誌18』の公開・刊行に先立ち、いち早くお知らせします。

新「神奈川県植物誌」の調査とその特徴

『神植誌88』、『神植誌01』、『神植誌18』の3冊の植物誌は、市民による標本の採集に基づいた植物相調査が実施されたこと、その際に採集された標本に基づいた分布図が掲載されていること、図鑑として

使用できるように検索表や植物図を備えていることなどの特徴を有します（以下、これらの植物誌を新「神奈川県植物誌」と表記）。その植物相調査は、市町村区を基本とした調査区（『神植誌88』では108個、『神植誌01』、『神植誌18』では行政区界の変更で111個）を設け、各調査区に生育する植物について最低1点の標本を採集することを基本に進めてきました。『神植誌01』は、その計画当初、『神植誌88』の補充調査として位置づけ（地域によっては全種の採集を目標としました）でしたが、『神植誌18』では、『神植誌88』の調査以来、再度の各調査区全植物の採集を目指しました。この調査は、『神植誌88』の刊行を目指して結成された神奈川県植物誌調査会会員の無償の活動（植物の採集、標本作成、標本整理）と、関係機関の協力により約40年間続いてきた息の長い調査です。

集められた標本と構築されたデータベース

3回の新「神奈川県植物誌」のために採集された標本のデータベースには、約50万点の標本が登録されています。標本の所蔵館、調査への協力館は、『神植誌88』では、神奈川県立博物館（当生命の星・地球博物館の前身）、平塚市博

物館、横須賀市自然・人文博物館の3館でしたが、『神植誌01』では、愛川町郷土資料館、厚木市郷土資料館、川崎市青少年科学館（現呼称は「かわさき宙と緑の科学館」）、相模原市立博物館、横浜市こども植物園が加わり、『神植誌18』では、大磯町郷土資料館、茅ヶ崎市郷土資料館、日本大学生物資源科学部博物館、藤沢市教育文化センターにも協力していただきました。また、登録された標本の中には、新「神奈川県植物誌」のために集められたものだけでなく、各標本庫で収蔵されていたさまざまな標本を含み、それらは各協力館の尽力と一部は神奈川県植物誌調査会の協力でデータベース化されてきました。データベース化された時期別に採集年ごとの採集標本数を図1に示しました。新「神奈川県植物誌」の調査の過程で、過去の他の標本のデータベース化も進められてきたことが読み取れます。

神奈川県で記録された植物の種類数

『神植目33』、『神植誌58』、『神植誌88』、『神植誌01』、『神植誌18』で記録された植物の種類数の推移を在来植物と帰化植物に分けて図2に示しました（『神植誌18』の数は仮の数字）。『神植誌88』までは、植物誌の刊行ごとに、在来植物も

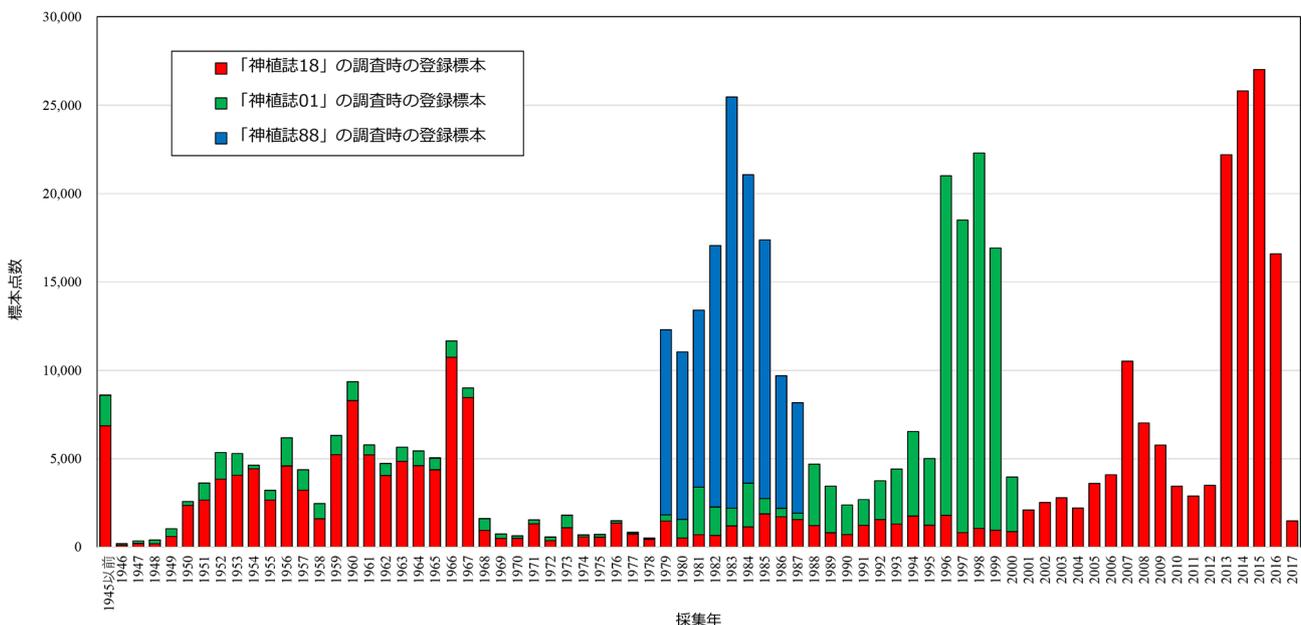


図1. 標本の採集年ごとのデータベースに登録された調査時期（第17回 日本植物分類学会ポスター発表より）。

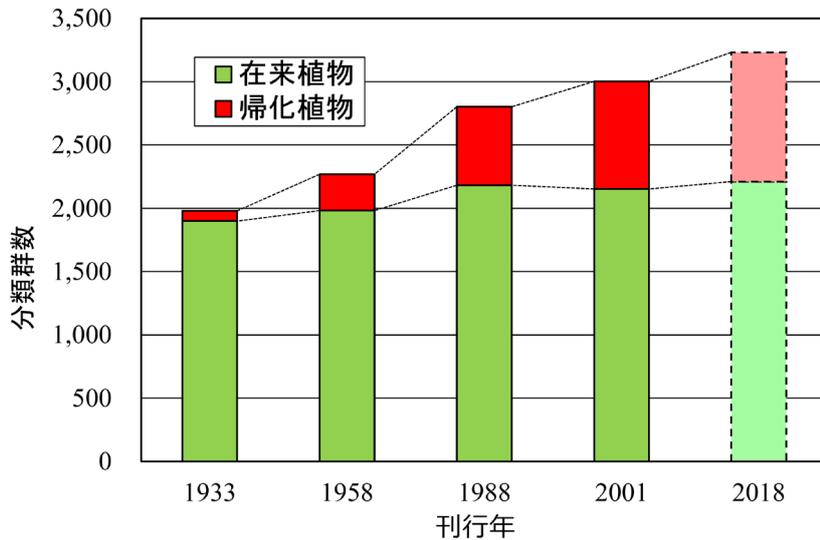


図2. 記録された植物の種類数の推移。『神植誌01』以前の数は田中（2016 自然科学のとびら 22: 12-13）による。

帰化植物も記録された植物数は増大しています。ですが、在来植物では、1988年と2001年では増加せず、『神植誌88』の調査で県内の植物相はほぼ調べつくされている、と思われて来ましたが、しかし、『神植誌18』の調査では記録数が増加しています。分類学的研究の成果による増分も含まれているかもしれませんが、ジンジソウ（深町 2017 Flora Kanagawa (83): 991-992；図3）やイワヤシダ（岡 2016 Flora Kanagawa (81):970）など、神奈川県で記録されていなかった在来植物が新たに記録されたことは驚きです。これらの植物は、これまでの調査で見つからなかったものが発見されたのか、植物自身



図3. ジンジソウ（足柄上郡山北町 2016年10月10日 勝山輝男撮影）。

が分布を広げて来たものなのか、興味深いところ。一方、帰化植物は、相変わらず増大し続けており、新しい帰化植物が侵入し続けていると思われます。

分布を拡大した植物たち

『神植誌01』の刊行後、本誌（第7巻 第2号）で『『神奈川植物誌2001』の分布図から分かること』と題して、分布を拡大した植物として、帰化植物ではウラジロチチコグサとメリケンガヤツリ、在来植物としてタシロランの分布図を紹介しています。ここでも、同じ植物の分布図を図4～6に示しました。それぞれ『神植誌01』刊行後も、着実！？に分布を拡大していることが分布図から読み取れます。特に、タシロランの内陸部での記録は増加しており、その要因については、今後検討してみたい課題です。

新「神奈川県植物誌」の成果

新「神奈川県植物誌」の成果の第一は、ここで記したような植物相に関する知見の増大ですが、調査に参加したことで常に身近な植物相を見つめる目を持つ多くの市民が育っています。また、集められた標本が県内各地の協力館の標本庫に収蔵され、地域の自然の証拠として活用可能であり、市民が集まり活動する場を提供していることも大きな成果です（勝山 2001 遺伝 55(4): 36-41）。ただし近年ではいくつかの課題もあります。集め続けて来た標本が膨大になり、各館で標本庫の

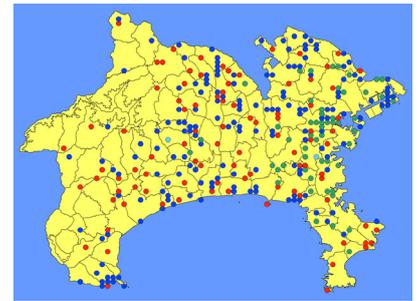


図4. ウラジロチチコグサの分布図。『神植誌18』に掲載予定の分布図をカラー化したもの。

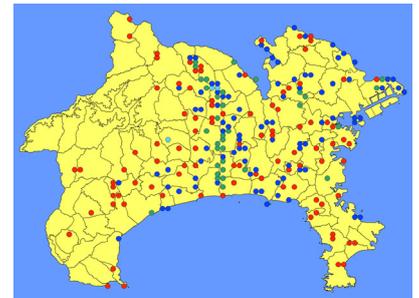


図5. メリケンガヤツリの分布図。

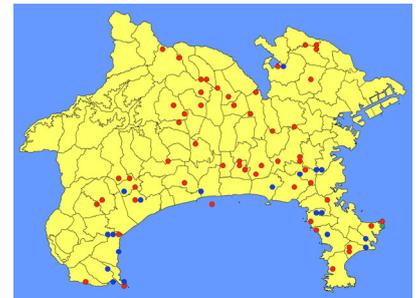
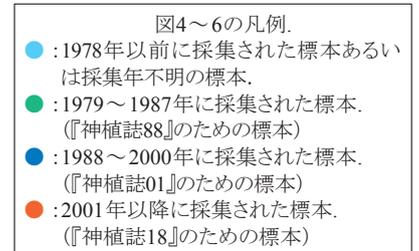


図6. タシロランの分布図。



スペースを圧迫しつつあります。また、全国各地の自然愛好団体同様、神奈川県植物誌調査会会員の高齢化は否めません。標本の増加や会員の高齢化への対策・対応は、今後も地域の植物相を把握し続けることが重要な使命である博物館が直面している重要な課題であると言えます。

なお、ここで示した成果とともに、地域植物誌をつくる意義とその手法、今後の展望について、7月14日から開催される特別展「植物誌をつくろう！」でさらに詳細に紹介しますので、ぜひご覧下さい（本誌16 ページ参照）。